

海外農業ニュース

No. 35

昭和47年10月20日発行
毎月20日発行

もくじ

日本青年海外協力隊特集

各国のボランティア活動状況 1

青年協力隊の原点をさぐる 5

日本青年海外協力隊
事務局長 伴 正一

座談会

協力隊OBに現地体験を聞く 25

熱帯農業へのイントロー協力隊 41

三 苦 広 助

トピックス

米以外の穀類（パラウイジャ）の
輸出促進とビマス制度の導入 47

アジ研 尾 村 敬 二

連載講座

熱帯農業のABC（第四回） 51

山口大学講師 西 村 昌 造

財団法人 海外農業開発財団

各国のボランティア活動状況

一九七二。一現在の International Secretariat for Volunteers Serviceによる日本青年海外協力隊事務局提供の資料による。

(一) 外国からのボランティアを受けいれている国(及び領土)とその人数
一九七二、一、一現在

受 入 国	人 数
リ ベ リ ア	278
マ ラ ウ イ	194
マ リ	31
モ リ テ イ ウ ス	29
モ ロ ッ コ	245
コ モ ロ	3
リ ビ ア	1
マダガスカル	102
南西○アフリカ	3
ル ワ ン ダ	219
セ ネ ガ ル	171
セ イ ケ レ ス	11
シ エ ラ レ オ ネ	287
リ マ リ オ	5
南 ア フ リ カ	10
セント・ヘレナ	3

受 入 国	人 数
(アフリカ)	
ア ル ジ エ リ ア	211
ア ン ゴ ラ	1
ボ ツ ワ ナ	142
カ メ ル ー ン	633
中 央 ア フ リ カ	49
チ ヤ ド	134
コ ン ゴ	15
ダ オ メ ー	174
エ チ オ ピ ア	310
ガ ボ ン	117
ガ シ ビ ア	85
ガ ー ナ	540
アイボリ・コスト	421
ケ ニ ア	868
レ ソ ト	253

受 入 国	人 数
パ キ ス タ ン	17
フ ィ リ ピ ン	480
シ ン ガ ポ ー ル	15
サ バ	57
タ イ	428
サ ラ ワ ク	9
ヴ ェ ト ナ ム	33
フ イ ジ ー	121
オーストラリア	3
ギルバート・エリス	17
ミ ク ロ ネ シ ア	296
ニ ウ エ	2
ニュージーランド	1
ニューカレドニア	2
ニューヘブリケス	30
パプア・ニューギニア	337

受 入 国	人 数
イ エ メ ン	33
シ リ ア	2
ト ル コ	25
(ア ジ ア ・ 太 平 洋)	
ブ ル ネ イ	10
セ イ ロ ン	26
台 湾	19
ホ ン コ ン	21
イ ン ド	713
バングラディシュ	27
イ ン ド ネ シ ア	117
日 本	17
韓 国	249
ラ オ ス	234
マ レ ー シ ア	617
ネ パ ー ル	238

受 入 国	人 数
ス ー ダ ン	30
ス ワ ジ ラ ン ド	134
タ ン ザ ニ ア	513
ト ー ゴ	192
チ ュ ニ ジ ア	175
ウ ガ ン ダ	374
アパー・ウォルタ	172
エ ジ プ ト	11
ザ ン ビ ア	499
(中 近 東)	
アフガニスタン	150
バ ー レ ン	14
イ ラ ン	182
イ ス ラ エ ル	19
ヨ ル ダ ン	14
レ バ ノ ン	12

受 入 国	人 数
ハ イ チ	51
トリニダド・トバゴ	27

受 入 国	人 数
エル・サルヴァドル	84
フォークランド島	3
グアテマラ	142
ギ セ ナ	2
ホンジュラス	50
ギ ア ナ	18
メ キ シ コ	34
ニカラグア	75
モンテセラータ	1
パ ナ マ	59
バラグアイ	76
ペ ル ー	376
ウルグアイ	14
ヴェネズエラ	238
バルバドス	271
ド ミ ニ カ	71

受 入 国	人 数
ソロモン群島	59
ト ン ガ	81
西 サ モ ア	71
ラオリス・フッナ	2
(中南米・カリブ海)	
アルゼンチン	7
ボ リ ビ ア	210
バ ハ マ	2
ブ ラ ジ ル	582
バーヨコーダー	1
英領ホンジュラス	171
チ リ	123
コ ロ ン ビ ア	289
コ ス タ リ カ	100
キ ュ ー バ	6
エクアドル	252

(二)

各国が開発途上国（及び領土）へ派遣中のボランティア数

派遣国	派遣機関	人数	派遣国	派遣機関	人数
ルクセンブルグ	1	11	オーストラリア	3	132
オランダ	1	483	オーストリア	4	264
ニュージーランド	1	108	ベルギー	28	606
ノールウェイ	1	125	ブルガリア	1	
フィリピン	1	135	カナダ	4	1,546
スウェーデン	5	245	コスタリカ	2	30
スイス	7	510	デンマーク	2	332
タイワン	1	3	フィンランド	1	17
イギリス	4	1,913	フランス	9	6,441
ソ連	1		東ドイツ	1	
アメリカ	17	8,433	西ドイツ	14	3,563
国連	1	52	アルジェリア	2	8
			イスラエル	2	
			イタリア	13	42
			日本	2	564
			リヒテンシュタイン	1	4
(28ヶ国)計		25,567			

注一、各国の派遣人数は、その国の機関が送っている人数の合計。

注二、日本は日本海外青年協力隊とOISCA。

注三、国により不詳の派遣数があるので合計数はふえる。

青年協力隊の原点をさぐる

日本海外青年協力隊事務局長 伴 正 一 述

ききて 財団 中 田 正 一

も く じ

海外農業専門家へのインターンとしての協力隊	六
ビギニングのエンド	七
海外協力における農業技術とは何ぞ	八
海外協力に都道府県の協力が要る	十
国内の世論形成者としての協力隊OB	十二
国別の専門家が要る	十四
農業協力にはコミュニティのサポートが要る	十六
農業協力のエバリュエーション	十七
不伝導体としてのマス	十八
ただひたむきに挑むのみ	十九
エリートとマス	二一
青年たちの成長が唯一の救い	二二
情感的に国を理解するということ	二三

海外農業専門家へのインターンとしての協力隊

中田 私の方の財団で、将来海外に出て働きたいということで登録

している農業技術者が、現在、約七五〇名ぐらいいるのです。

そのうち約一割ぐらいが協力隊OBとみていいわけです。その人たちのかなりの人数が、再び海外へ出て協力活動や開発事業にたずさわっています。だから協力隊OBはひじょうに有力な技術者のソースだといつてよいのです。

彼等が協力隊員として海外へ出たときは、それほどではなかったらうと思うのですが、二年間の海外での洗礼をうけてきて、海外に対する力のいれかたが、すっかり、筋金入りになったというような人が多く見うけられます。ですから、私のところへ来て、これからまた海外へ出たいから、ひとつ、登録させて下さいとか、あるいは、海外で新しい働き場があったら心配してほしいというふうなのが多いですね。

私たちとしては、そうした人たちの気持をくじかないように、さらに技術のブラッシュアップもしなければいけないと、努力しているわけです。

伴

農業面で、帰国隊員が、ひじょうに貴重な海外協力の人的ソースであるということは、私も痛感しております。ことに農業問題というのは、開発途上国では、同時に社会問題でもありますから、単なる技術問題としてとらえるにはあまりにも問題が深刻です。そういう見方で物を見ると、いま日本から出ている農業関係の専門家の中には、失礼になるかもしれないけれども、開発途上国の農村問題という点では、まだ素人の域を出ない方

が少なくないのではないですかね。

中田 それはそうかもしれませんが。

伴 そういう面で、協力隊員が特定の国の特定の地域で、二年間やって来たということは、もうこれは日本中探しても得難いような貴重な体験者だと言ってもよいでしょう。一般的にいつて隊員の二年というのは、将来の海外協力、農業面における協力要員の、インターンみたいな形になっておるとい感じがします。私たちもそれだけに、二年間を今よりもっとと有益に過ごさせるように、努力しなければいけないわけです。けれどもそうやって有益にすごした人が、その有益な体験をあとでつかえないということになると、これはまた失望なんです。そこらあたりがウチの方でも関係機関と呼吸を合わせて行かなければならないところでしよう。

中田 ええ、それは本当にそう思います。日本とはまったく異質の社会の現場で、実際にやってくるんですから。海外農業専門家のインターンという、そういう見方も出来ますね。そうした経験者はじつに貴重なわけです。

ピギニングのエンド

伴 それで、局内でいろんな会議をやる場合の大前提の問題として、帰って来た時点をどう把握するか、この問題を取り上げて

おります。結論は、恐らく、the End と把握するのではなくて、End of the Beginning として把えるべきだということになりそうです。Beginning の End だというようにとらえると第一段階の終りに過ぎないことになる。協力隊事務局は第二、第三の段階を頭に描きながら、仕事としては主として第一段階、すなわち the Beginning のことをやっておるので、国全体からみるとどこかで第二、第三の段階のことをやらなければならぬと思っています。

中田 それはもう、おっしゃる通りです。本当に Beginning ですね。ですから、その後コロンボプランの専門家となるばあい、それにはせいぜい五年ぐらいの経験がほしいということが常識です。それから国連の専門家あたりになると、せめて、十年ぐらいの実際の経験のある人でないと、という一般常識があるわけですね。そうしますと、二年間ビギニングをやってきた人について、こんどは、いわゆる専門家という名前をつけてもはずかしくないようにブラッシュアップしなければならぬ、という責任をわれわれは感じるわけです。それは日本の社会全体が感じなければいけないわけです。

海外協力における農業技術とは何ぞ

伴 そうなんです。ところで僕はこの辺のところに、ひとつ問題を感じているのですが。それはこのところを簡単に技術のブラッシュアップといつていいのかということです。やっぱり、

高度の技術も必要だと思うのですけれども、純粋な科学技術の度合いだけで、協力要員の適格性を云々するのはどうかという疑問を持っているんですよ。農業協力というのは、技術協力というのがいいのか、むしろ、開発途上国の農村問題にたいする協力というのがいいのか、これは考え方の大きな別れ道ではないでしようか。純粋農業技術協力というなら、その方向でブラッシュアップのやり方も自ら定まる、日本の農業試験場でこうこれだけの水準にいかなければいけないというようなことになる。反対に、純粋農業技術のほうは、それはまたそれである人がいるけれども、これから育てて行かなくてはならない不可解の人材は、農村問題に強い、ある程度の地域専門家なんだということになれば、ブラッシュアップの内容も自らちがつてくるわけでしよう。

中田　そういうことです。たんなる技術だけではないのです。日本の試験場でやっている技術だけではすぐには役に立たないし、受け入れ社会の事情もちがう………。

伴　むこうへもっていったら、高嶺の花で、現地人には、手の届くはずのないことをいくらモデル地区でデモンストレーションしてみても、それはひよっとしたら一種のショック療法になるでしようが、先ずは日本の実力誇示に終わってしまうでしょう。農業協力というのは、恐らく、一番大切であって一番難しい、一番時間もかかるというもんじゃないですか。現地の農民たちが、緩慢ながらも進歩への足どりをスタートする。この動きを起動

させなければいかんわけでしょう。そんなのは、純粹科学的な農業技術の問題以上の問題ですね。まさにいろんな社会経済的な問題の有機的複合体なわけですね。そこらへんに、私は技術協力一般の中で、農業協力の把握の仕方が、どうも技術偏重になつてゐるような気がしますな。

中田　そういう点はたしかにありますね。たんなる純粹な機械、たとえば自動車のようなものであれば、日本であろうが、インドであろうが変わらないでしょう。農業技術は応用技術で、理論そのものは同じでも、気候や土地がちがうし、という背景がちがいますからね、ある特定の農村の中における農業技術ですから、そこが……………。

伴　極端に言えば、コンピューターライゼーションの場合でさへもですね、社風とか、会社の気風とかいうものによつてやつぱり、そのプログラミングがちがうそうです。あんなコンピュータみたいなものでも。いわんや農業をや、という気がするんです。そのはそれで、ひとつ問題の提起なんです。

私は今の日本の農業技術協力 *ヨロコ* というものが、あまりにも純粹技術に、重きをおきすぎていると思うのです。

海外技術に都道府県の協力が要る

伴　今後帰国隊員が再び海外へ出る、あるいはライフワークとして出て行く。海外を舞台にするという場合に、もちろん純粹科学技

術のブラッシュアップはしなければならぬわけです。その面でやっぱり、今のシステムはひじょうに微弱ですな。これをどういう形でやるかということになれば、まあ、私はひとつは予算問題もあると思いますけれども、予算だけでは、ことは進まないと思うのです。農林省の管轄の農業試験場などでころよく、うるさがらずに面倒をみてもらうということが必要だけでも、今大きく抜けているところは都道府県だと思うのです。地方はほとんど無関心じゃないですかね。そつぽはむいていないけれども、無関心だと思えます。だから現状はというと純粹技術の面でのトレーニンググラウンドの中で、国の直轄の中の若干の農業試験場が関心をもって協力してくれておるだけで、相当広範なトレーニンググラウンドの大部分が無関心の状態にあるということになるでしょう。ことに都道府県が。これはやっぱりひじょうに痛いと思いますね。

中田 それは、まさにその通りですね。

伴 そこらへんの協力を得るために必要な金ということになれば、もう一度金の問題に戻るかもしれませんが、金がついただけでは、これは安心ならないんで、もうちよつと広いトレーニンググラウンド、ブラッシュアップの場を用意するということはあるように思うのです。そういうことで、まあ私がこつちへ来てから、地方、ことに都道府県段階まで、協力地盤を広げようというんで大分ワイワイさわいでおります。

中田 なるほど、なるほど、……………。

国内の世論形成者としての協力隊OB

伴

協力隊員にいい人材を確保するにも都道府県段階で熱が入っておるとずいぶん違いますし、帰って来た隊員でも、やたらに東京周辺で就職口を求めるだけでなくて、もう少し郷里で、本当に国内の世論形成層として活躍してもらいたいですね。協力隊隊員が、全部海外要員になるべきだとか、なるのが望ましいとは思わないで、海外要員になる部分と、日本にとどまってる今度、日本の国民に向って、アジアの問題だとか、開発の問題というのを訴え続けるような中堅リーダーになることも素晴らしいと思うんですね。そんなことで、地方へ力を入れるということは、今のような、海外要員のブラッシュアップの面からも考えられるし、それよりさらに根本的には、帰国隊員の将来全般の上で大切だと思う。やはり、なんらかの意味で日本民族の進路に寄与して貰いたいんで、内と外とは、本質的にちがわないと、こう思っているんです。まあちよつと問題がそれかもしれません。

中田

いや、それではないんです。大事な問題です。それは、大部分はやっぱり地方へ帰るといふ……………。

伴

そういう現状ではないんです、いま。

中田 あつ、そうですか。

伴 ほとんどが地方からの頭脳流出です。

中田 流出して、そして二年間終えて、こんど……。

伴 二年間終えて、もとへもどらないんです。

中田 もどらない……。そのもどらない連中の何人かは財団あたりへ登録している中にはいつているわけですね。

伴 ええ、そうです。全部もどすというのも行きすぎで、海外要員としてずうつとのびて行くことも非常にいいことです。しかし、海外要員としてのびるだけが唯一の進路だと思つたら、これはやっぱり協力隊事業というのは非常にせまくなつてしましますね。国民的事業になるにはちよつと困難になるでしょう。そういう意味で、私は協力隊事業が国民的基盤のうえに立つということは大黒柱みたいなブリンシブルだと思っています。その中で帰国隊員の相当な部分が、もつとも開発途上国の現実にそくした協力要員となる、そういうように成長させたい。こういう考えですね。

中田 なるほどね。いまコロンボプランあたりで、政府ベースで海外へ出ているのは試験場でずうつと技術畑をやつた人が、何年か雇われて行つてくるといふ形、それで海外が終ればまたもと

へもどる。そういうのはどちらかというと、現地の事情についてはうといわけなんです。それにくらべ協力隊の人達は、技術の方はじやつかん未熟かもしれないが、現地の事情には非常に明るい。両方あわせたのがいいのではないかという感じもします。

伴

実を言うと、遠い将来の図式としては、現地体験を若い時代にずうつとつんだ人が成長して、そういう現地の実情というもののかかった人のマネージメントのもとに、高い技術も活用されるというようになるほうがいいと思いますね。せんえつながら…………。

中田

それはまあ、考え方としてはその通りでしょうね。

国別の専門家が要る

伴

農業でもね、私はやっぱり、国別の専門家でなければうそだと思ひんですよ。

中田

国別のね…………。

伴

ええ…。インドとフィリッピンでは全然違いますしね。社会構造から問題の所在が違いますしね。アフリカはアフリカで違いますしね。一つの国の農業問題をライフワークにして少しもおかしくないぐらい大きな問題をそれぞれの国がもっており

思うのです。そういうものを理解しないで、業種別に細分化された技術をコンバインして行っちゃってね、それはやっぱり水に油ではないんですかね。だから日本のプロジェクトがひきあげたときには数年にして、また、もとにもどる……。

中田 そうすると、インドの稲作だとか、フィリピンの畜産の専門家だとかいうふうですね。あるいは乾燥地帯の土の専門家、あるいは、アフリカの専門家……。

伴 私の言うのは、そこまで職種は分かれなくてもいい、地域専門家というんです。

中田 ああ……なるほどね。

伴 だから、技術的には稲作であるとしても地域としてフィリッピンが専門だということになればフィリッピンの農業問題全般について造詣が深くなくてはならない。早い話が土地制度もわかってなくてはならない。稲作技術だけでは実際のところ現地の拘えている諸問題と齒車のかみあいようながないと思うのです。木に竹をついだようなもので、……。

中田 はあ、そうですね。

伴 国別のエキスパート、これはまさにいわれているような一種の地域専門家ですね。農業における地域専門家は、農業部門に

における一つの専門技術を持ちつつ、その地域の農業問題に強く、その他、その地域の言葉を理解し、住民の気質をしっかりとというような人でしよう。

農業協力における海外協力要員には、こういう形での一種の完成したエキスパートというものが基幹にならなくてはならんのではないでしようか。今はまったくはしりみたくないものではないんでしようか、今の農業協力というのは……………。

中田 それはそうかもしれませんが。それは局長、卓見ですね。

伴 ちょっと、素人がえらそうなこというんですけど、……………。

中田 いやいや、本筋の議論だと思っています。

伴 どうも、そうしか思えないんですよ。

農業協力にはコミュニティのサポートが要る

中田 ええ…、たしかにそれは技術協力論の基本ですね。純粹技術と地域のバックグラウンドとの関わり合いが農業協力の場合にはとくに大切ですね……………。

伴 農業のばあいにはことに、そうでないといかんと思うんですがね。これが、電気通信なんていうことになるかそれほどのことはないんですよ。イラクの電気通信と日本の電気通信とは、

そうちがいませんからね。こういうのはインターナショナルな
もんですからね。

コンピュータライゼーションなんかも、まあ、そうなん
だ。けれども、そういうインターナショナルなもんでも、やつ
ぱり、土地柄とか気質によつて、バリエーションが出るぐらい
ですから、農業にいたってはね。教室を作り、機械をすえてお
しえるようなものでなくてコミュニティが教室になるわけでは
よう。コミュニティがわからなければね、まったく自己満足の
ものを一生懸命つくつてしまう。向こうはヤットンとしている
ということだけではないでしょうか。向こう側に熱心な人がい
て、たいへんよく協力してくれるようにみえてもね、コミュニ
ティ全体のサポートをうけていなければ、そこを去つてしまえ
ばもとのもくあみで……。

中田　そうそう……。

農業協力のエバリュエーション

伴　僕はそういう意味で効果測定とか、エバリュエーションとい
う言葉が、はやりの言葉ですが、あまり好かない。軽卒なこと
をいうなと言うんですよ。これぐらいの世紀の課題にとりくん
でおつてですよ、三年ぐらいして効果はどうだったなんて、そ
んな近視眼的にものを見るから、とてもいかなのではないん
ですか。

中田 それは、せうですね。農業そのもののテンポといっても三年やなんかでは……。

伴 出来っこないでしょうな。

中田 せめて、十年、二十年ぐらいのテンポで、エバリュエーションをやらないといけないと思います。

工業とちがいますからね。たとえば、永年生の作物を作ったとなれば、十年でやつと採算がとれはじめるのです。二年や三年でエバリュエーションといつても無意味ですね。

不伝導体としてのマス

伴 協力隊事業について成算があるかといったら、ほんとうのところ絶対的な成算はないんですよ。ということは、これは、こつちの話なんだけれども、開発途上国の通常のパターンとして上層階級というものがあつて、それで、もうひとつ「マス」すなわち一般民衆がおります。

上層階級までは技術が、トランスファーできるわけですよ。それはそうむずかしい問題ではないのです。問題はそこからマスへ伝わらないわけです。マスというのは技術とか知識とかいうものの不伝導体になつておるんです。不伝導体だから電気が伝わらんのと同じわけです。

中田 なるほどね……。

伴

今、私が言っているのは、協力隊事業というのはこの不伝導体を伝導体化する仕事なんだということです。半世紀とか一世紀をえいえいとしてやってみなければわからない。未来永劫に伝導体化しないものかもしれない、ヒヨツとしたら。なるかならないかわからないが、それにいどんでみる、これが協力隊の仕事だと私は思っているんです。

中田

なるほどね……。

伴

ただひたむきに挑むのみ

ただ、ひたむきにいどんでいるのであって、計画が出来、成果があつてやっているといたら、それはウソになります。だから行く隊員にも、そういつています。一年半ぐらいたつてから俺は何をしたかと、そんなに効果測定 *Effect* にならんようにしよう……。ある人は、タネをうえただけで発芽するかどうかわからんという状態で帰ってくるだろう。ある人はタネは発芽したが果して育つかなど思いながら帰ってくる。非常に幸運ないろんな条件にめぐまれた人は、それがいいよ実をむすび、木になる見込みまで立てて帰ってくる。うまくいったことがわかつて、二年か三年で帰ってくるという非常にラッキーなケースもある。いろいろなんです。しかし、隊員諸君が、私ぐらいの年になるごろに、ああ、あの時のタネが見事に成長して、すばらしい実を結ぶのを見ることができるとも知れない。要はコミュニティの人々になんらかの形で進歩への衝撃をあたえ

ることだと思ふ。革命だなんていうのでなしに、小さな衝撃をあたえ、つきからつきへそれを繰返して行く。それがみのつて、彼等が長い停滞から静かに立ち上つて、上向きになつてくるといふことになれば、それが十年かかるか五十年かかるかわらないけれども、誠に大いなる成果ではないでしょうか。そしてこういう最初の端緒を与えた隊員諸君ももつて冥すべしではないかと思ふ。

中田　なるほど、不伝導体のマスをねらうということは大変ですね。

伴　これはまったくのところ、途方もなく大きな人類の課題です。

そして隊員諸君はその大いなる課題に挑みかかつておるんですね。小さい珊瑚の虫が何十年何百年の積み重ねで、ちゃんと大きなサンゴ礁になるといふようなものかも知れません。

南北問題というものを軽々に考えてはいかん、南北問題とは本質的に気の遠くなるような難しい問題ではないだろうか。簡単にいくものだと思つてとりかかると大間違いだ。フラストレーションを生むだけです。援助関係の会議に出て、あとで一杯やるときには、きまつて長嘆息というか溜息ばかりききます。同じような議論がグルグルまわっているだけだからです。そしてその原因は、物の見方がショートサイテッドだからということになるんだと思うんです。南北問題とはそれほど難かしい問題だと思つてゐるんですよ。

中田　それでそういう国はほとんど農村なり農業者が、主体になつ

ておりますからね。今おっしゃったような、マスと中央のひとつかたまりのエリートとの関係が問題なんですね。

エリートとマス

伴

今の技術協力全般の考えかたというのは、日本からエリートへトランスファーとして、それからさきは相手国の努力だと、こうわりきつているみたいですね。それではもう南北問題は駄目だと思うんですよ。エリートからマスへ、そのエリートへたまった水をマスへ流さなければいけないんだけど、マスへの水路を作り上げなければ水は流れる訳がない、エリートからマスへ水をチャネルして流す方法がひとつあるし、そのマスじたいが水が浸み通る体質にかえていくことがひとつある。この二つをやらなければいくらエリートにトランスファーしてもそこで、止ってしまったては何にもならないですね。

中田

だいたい、そういう過程になっておりますね。それで、その効果測定と、効果測定といったってね、それはね、エリートへ伝達していくところまでは、それはわりあいと簡単にいけるかもしれない。しかし、その後が問題ですね。そこらにやつぱり協力隊の大事な働き場があるんでしょね。そのマスに直接接し、そのマスの中へはいりこんでゆく……。

伴

ええ……。

中田 いや、局長の考え方は非常にすつきり……。

伴 いや、やっとすつきりしかかってきたんですよ…。

中田 あ、そうですか。

伴 三年かかってね。はじめはそんなこといつていましたがね、効果だとかエバリエーションだとか。だんだん考えていくと、おいおい、とんでもない方向へ行ってるぞと。

試行錯誤をへて、やっと今の心境になりましたね。

中田 ああ、なるほどね。しかし、それは非常にすつきりしていませんね。

青年たちの成長が唯一の救い

伴 しかし、ほんとうに成算がないんですよ。なるかならんか、

国によつてはなるだろうし、地域によつては未来、永劫にならんかもしれない。半世紀の努力がむなしかったということがありうるかもしれないですよ。

それぐらいキビシイですね、感じでは。だが、そのばあいには、半世紀の努力が空しかりきというところがかりにあったとしても、唯一の救いは、帰ってきた青年が、人間として成長したと例外なく自覚していることです。相手国への協力という意味では、タネをまいたつもりだったけれども発芽もしなかったとい

うことかもしれません。何回まいても発芽しなかったかもしれないけれども、その過程で、人間形成というか、これには、いろんな角度がありますが、その面で、文字通り一人の例外なく実りがあつたといっているのです。そしてどんな場合でもこの成果だけは確実に残りますね。

中田 そのことは、確かに、ひとつの救いでしょうね。ただね、私の感じることは、タネをまいたとする、そのタネがいきておれば、タネというのはある温度と、酸素と、水分と、そういう環境条件が揃ってくる芽が出るんです。ですから、その環境条件の整うのは、三年先なのか、十年先なのかは解らないが、いつかはかならず、そのコミュニティーにおいて発芽するという希望と確信とは、これはもっているいいんじゃないかという感じがします。

伴 さあ、正直にいうと、失礼に当るかも知れないが、そうは樂觀出来ないと思うんですよ。南北問題はもっと厳しいと思いますよ。しかし、絶対確実なことは如何なる場合でも協力活動の過程で青年達が成長するということです。

情感的に国を理解するということ

伴 それだけでなくて、日本が、これから大国になっていろんな役割をするときに、日本がいろんな国を理解するうえにおいて、そういう青年たちの体験が国民のなかへ、浸透して、日本国民

全体、国全体の開発途上国への理解度が深まる。青年たちを媒介にして深まるということが考えられます。知識的な意味よりはもつと情感的なものをふくめての理解というのが深まってくと思うんですよ。その深まりが実は誠に大切なことなんで、これが必要れば日本は、また、その大事な進路を誤るかもしれませんね。

中田 それは大事な点ですね。

伴 結論として、南北問題に、これなら大丈夫というような名案はないと思いますよ。もう挑むだけだと思いますよ。

おそらく、どこからも本当の名案は出ないんじゃないんですかな。

中田 いや、いろいろありがとうございました。今日のお話は、日本の青年協力隊の原点をさぐる思いがしました。

協力隊 O・B に現地体験を聞く

時 四七年八月二十九日夜

所 アジアセンター

話す人 加賀谷 英 明 (丸紅・砂糖部)

阿久津 厚生 (丸紅・飼料畜産部)

吉川 浩 史 (協力隊事務局)

難波 輝 久 (協力隊研修生)

聞く人 中田人材情報部長 (財団)

四氏の海外での技術協力のあらまし

中田 協力隊事務局の御配慮で、それぞれ専門を異にされる四人の方に、お集りを頂きました。今日は皆さんの現地での体験談をお聞きするとともに、今後の協力の在り方その他について、御意見を展開して頂きたいと思います。加賀谷さんはお茶、阿久津さんは獣医関係、吉川さんは椎茸栽培、また難波さんは稲作と、それぞれ違った専門分野で活躍されたと承知しています。専門が違うので、最初に現地での状況を詳しくお話し下さい。まず加賀谷さんから。

加賀谷 私は四二年の三次隊員で、フィリピンのレイテ島の西海岸にあるイサヤ農業大学にいました。松本君とペアで、お茶の栽培指導の要請によって行ったわけです。ところが現地には茶の木はなく、レイテ島の知事が台湾に行ったとき、苗木を三〇本持ち帰り、これをアプイルの農業試験場に植えたのが育って、三年目をむかえたので、日本へ専門家を要請したと言う実情でした。

中田 私はこの三月に、お話しのアプイルの農業試験場へ行きました

た。

加賀谷　そうですか。試験場の正面玄関に向つて、左手に二九本植つていゝるのにお氣付きになりませんでしたか。私たちの行つたときは、彼らはお茶の栽培を知つていませんでしたから、枝ものびるままにしてありましたから、刈こみから教え、農薬散布や施肥についてもアドヴァイスしました。お茶の製法も分つていなかったようです。

中田　阿久津さんはアフリカのモロッコへ行かれたのですか。

阿久津　私は四二年の二次隊として、モロッコのカサブランカにある農業省の中央研究所にいました。一、二カ月間は、食品関係、飼料関係、家畜ワクチンを一応やつて、好きな所へ行けということでした。私たちは三人で行つたのでして、一人は飼料の化学分析、一人は細菌の方へ、私は各保健所から血清が送られてきて、それによつて牛の繁殖障害の診断をしていました。

中田　モロッコは回教国ですが、畜産事情を少し話して下さい。

阿久津　牛はモロッコの在来種とフランスから導入した種類とがあり、二五〇万頭位、羊は人口と同じくらい、また山羊は山岳地帯にいます。豚も少しはいますが、これは欧州人のために飼っているだけです。

中田　吉川さんは椎茸でフィリピンへ行かれたそうですが、フィリピンでは椎茸栽培のバイオニアでせうね。

吉川　そうなんです。四一年の三次隊で行つたのですが、始めは椎茸があるのか、ないのか分らず、山歩きして探しました。それらしいものを見付け、そのサンプルや胞子を日本へ送つて鑑定してもらい、間違いないと言うので栽培を始めたのです。同時にマッシュル

ームにも手を付けましたが、椎茸よりも早く結果が得られるからです。

中田 フィリピン政府の要請があつたからですか。

吉川 日系の二世から出た要請が発端のようでした。私の出発前に、日本の菌の学者が、マレーシアのサバ州の四、八〇〇メートルの所で、椎茸菌を発見されたと聞いていましたが、その後栽培されたとも聞きませんので、南方で栽培し、収穫したのは、私が最初でせう。

中田 この仕事は引き継がれているのですか。

吉川 私を含め、すでに五人の協力隊員が行っております。また私のときのカウンター・パートを、昨年一〇月から今年の四月まで T C A の研修員として、研修を受けさせました。栽培上まだ問題はありませんが、指導協力のワン・ラウンドは終わったと話し合っています。

中田 それは椎茸のできることが分つた段階だと言う意味ですか。それともかなりの地域へ一つの産業としてのばして行ける見込がついたと言う意味でせうか。

吉川 椎茸が山に自生していることが分り、試験栽培を標高二、四〇〇、二、三〇〇、二、二〇〇、一、五〇〇メートルの四カ所に設け、栽培方法がかなり明らかになつた。日本の培養菌も使つたが、原地の菌を現地原木に使つたのが最も好成績だった。初め私は現地の菌では、雑菌にくわれてだめかと思つていたのですが、逆に雑菌を食う位に強かつた。それで乾季と雨季のバランスをとつてやると、栽培しやすいのです。またマッシュ・ルームの方は稲わらの堆肥を使って、菌を発育させ、収穫が終つたら、その堆肥を野菜栽培に回し、その生産でも好成績をあげました。このマッシュ・ルーム

と野菜を関連づけたことで、これから各農家に普及しようとする段階に達しました。

中田 難波さんはインドで稲作指導をなさったのですね。

難波 四四年の三次隊員としてインドに行き、三年間いました。場所では中部インドのライプールです。インドでは一九五八年からフォード財団の援助でI・A・D・Pが始まりました。ライプールにもやがてI・A・D・Pが適用されたが、稲作地帯としておくれていたためか、順調に計画が進展した。それでさらに日本式稲作を普及しようと言うことで招かれたわけです。行った当時は九五%が直播栽培で、エーカー当り四五キロから五〇キロの種子をまいていました。しかも一般農家は無肥料栽培ですから、エーカー当り収量は平均粃で五〇〇一六〇〇キロでした。最初の年の乾季作は、雨がなかったので、後から考えれば当然のことですが、失敗しました。灌漑には政府も力を入れていたので、二、三年後には井戸のある所へは電気を優占して引いてきました。灌漑できるとなると、高収量の品種を使い、肥料をやれば、収量はすぐはねあがります。私たちの最後の年は新品種によつて、エーカー当り粃で三、五〇〇キロをあげました。

インドの稲作と協力関係

中田 その地区へは協力隊員が続々行っているのではないですか。

難波 今け少なくなっています。今年の年頭教書で、ガンジー首相は、外国援助はなるべく受けまいと言ったのです。特にアメリカのピースコーを指していたようです。州政府や現地機関は、日本の協力隊は、ピースコーと違う性質のものだから、来て欲しいと要請書類を出しているようですが、中央政府で保留にされる。

残念なことです。

中田 インドという国は、すじを通す国ですから、それに引っかけたのですね。昨年の情報では、グリーンレボリュウシヨンの成果があつたようです。

難波 気候的にも恵れたわけです。緑の革命の進んでいるのは、北部ではパンジャブ、U・P、ビハール州など、東部ではオリッサ州の稲作が進んでいます。ライプール地区には、キャナルは全くなく、年一作で、貧して農民が多い原因となっています。

中田 日本式稲作は一九五二年からインドに紹介され、その後八カ所に日本の稲作模範農場が設置され、これは現在普及センターとして四カ所に存続していますが、これらとの関係はどうなっていますか。

難波 私たちの場合は、完全に農村へ入りこんでいるのです。住いも農家そのもの、朝は早くから田に出る、夜は多くの農民が話しに来ると言つた生活なんです。協力隊の場合は現地の人々との交流が最も大事なことだと思います。

現地での活動の実情

中田 加賀谷さんの場合は、吉川さんの椎茸の場合と似た所がありますね。

加賀谷 条件はもつと悪かつたのです。フィリピンでは、一部の中国人を除いて、茶を飲む習慣はなく、ブラック・ティーを病氣になつた時に飲むくらいです。リサーチ・アグリカルチュア・カレッジに所屬して、茶の木を探して歩きまわした。一カ月後によりやくアップルの試験場に、二九本の茶の木を見つけた次第です。仕方なくこ

の二九本を手がかりに、挿木でふやしてゆきました。幸い農業大学に所属していて、こちらの言うことも分ってもらえて、技術上の協力も得られました。

病害虫防除についても、現地の先生と組んで試験をやりました。

しかしレイテの環境条件、また嗜好習慣などの点から、急にお茶をふやすのは無理でせう。それで私の相棒は、野菜栽培について協力し、成績をあげました。また持つて行つた八木式の土壤検定器を残して来たのですが、利用されているようです。また言葉が通じあうようになつてから、氣象クラブの学生とグラフ作りをしたり、最後には水泳の指導や日本語クラスをもつたりしました。

吉川 椎茸の要請のとき、たまたま私は向うにいたのです。標高一、五〇〇メートルのバギオにあり、お茶の隊員もここえ来るものと思つていたのです。

中田 皆さんから協力隊員の仕事の内容をうかがいましたが、こうした現場での活動を通して、これからの協力隊はこうあるべきだなどの点を、つきにお聞きしたいと思います。

加賀谷 私の場合のレイテ島は、太平洋戦争の激戦地であつた関係からか、最初は特異の眼で見られました。外出の時はガードマンをつけられ、身辺に気を使つてくれました。一カ月後にはそれもなくなり、見方が変つてきたようです。パーティの時など、自分を紹介するのに、自分はギリラであつて、日本兵を何人殺したなどと、フランクに言つてくれるようになった。私たちは彼らの中にとけこんで、日常の接触から、戦時中のゆがめられた日本人像を正常なものに変えたかと思ひます。技術の面では、二年間という短かい任期、また言葉のハンディから、その効果は問題でせう。しかし、例えば

苗床作りにしても、彼らと共にやりますから、粗雑な彼らのやり方が、自然に私たちのやり方をまねて、丁寧なものに変わって行ったのです。このように小さな技術でも彼らに吸収されたものは多いと思います。

中田 戦時中の日本人のイメージを変えたし、事業としては、小さいことでも積み重ねたこと、地域の中へとびこんだこと、短期間でなく長い将来にわたって地域に産業を興す努力をしたこと、などが注目されますね。

阿久津 海外へ出る前に、協力隊として三つの目的が示された。それは技術協力、日本の紹介、帰国後は海外経験を生かすことです。しかし技術協力の点では、年令や経験のハンデがあるから、この面で力を入れるには、先方の計画にあった人材を選び、専門家プラス協力隊として行くのがよいと思います。企業ベースの場合は、わが方に必要なものを開発するという考えになるが、協力隊の場合は、相手側の事を最初に考えての仕事だと思います。

つぎにアフリカの人々は、ほとんど日本を知らない。私たちも初めは中国人かベトナム人だと思われた。それで大使館から日本紹介の映画を借り、この映画会を機会に日本を知ってもらった有様でした。二年間で相手国の事情もかなりわかり、畜産関係の資料も持つて帰ったのですが、これを活用する機会に恵まれません。帰って、すぐ就職できたのはよかったです、外地での経験が生かされないのが残念です。また協力隊の活動が、国内でどのように見られているかも問題です。

中田 実質的には国内でも真価は認められている。しかし、協力隊だけでなく、海外での仕事は、何かものずきがやっているという風

にしか考えられないようで、海外の仕事が日本の社会で、高く評価されるまでには、時間がかかると思います。

難波 わが国は日進月歩の勢いで進んでいるが、海外にいたと、この進歩からとり残されているという気持ちにおそわれます。若い人が海外へ出たがらないのも、この辺に原因があるかも知れません。

地域社会に密着した協力が大切

中田 海外協力は相手側の立場にたつて、物事を考えるべきで、向うの農村へ入りこみ、地域の末端で、じかに農民に接しているのが協力隊の特色でせうね。

加賀谷 日本人は東南アジアやアフリカで、エコノミック・アニマルと非難されています。協力隊の場合は、相手の立場で物を考えているので、日本人に対するあやまった見方を是正し、エコノミック・アニマルの非難を緩和していると言えます。商社の利益追求に片寄った行為のよい例は、ミンダナオ島の木材伐採でしょう。無計画に切っているので、あの国の木材資源はやがて枯渇するでしょう。協力隊が現地の末端に入っていることは、住民生活を理解している日本人もいることを実証しているわけで、この事業は必要だと思えます。

中田 日本はGNPの一割の協力はすべきである、と外から要求されている。受ける方も、日本はいくら金をよこすのかと、日本側の顔色をうかがっている。協力隊は、金や物でなく、人間対人間のかわりあいだと言うことが特色かも知れません。

難波 インドの場合、外国人がライプルーに来て、住んでいた、というだけでは、意味がないと言うのです。アメリカのピースコーが

それで、彼らは法学部を出て農業を教えていた。技術には関係なく、遊んで、友達になつて帰えるだけだと。私たちは友好親善も、技術を通してのものでなければ、意義は薄いと思います。

ある時の稲作が、ガールフライにやられたが、日本にはこの害虫がいないので、参考にするものがなく、自分でその発生経過を調べ、その防除方法を考えました。これをレポートにしましたが、現地側もこうしたことには関心が強く、このため一層友好が深まりました。

中田 ビースコーとの比較がいつも出ますが、今度の民主党の副大統領候補は、ビースコーの最初の長官で、彼が副大統領になれば、ビースコーの性格も変わると聞いています。それは、今までアメリカ中心にしていた考えを、相手国中心にする、という発想の転換があるだろうと言うのです。

難波 インドの場合、アメリカのビースコーは、意味がないとして、どんどん帰されるわけです。日本側も、この巻きぞえで、帰されるわけです。

協力隊のプロジェクトの問題にふれますと、条件が整えば始めてよいと思います。たんばつ式の形でなく、何年間かのローテーションを組んでやるのです。稲作の場合でも、その土地にあつた栽培体系づけをするのです。

吉川 インドでは、ガンジー財団のやっていた、孤児、身体障害者、未亡人などの更生活動が、政府の援助うち切りで困難になり、協力隊を入れ、農業生産で得た金で運営しよう、という構想がその背景にあります。

また最初からプロジェクトを認識して行つた例は、フィリピンのバギオ近くの五人のチームに見られます。向うでチームを作つたの

ですが、グループの人間関係はうまくゆき、フィリピンのリーダー的存在になっています。専門家のプロジェクトの場合も、人間関係が一番難かしいようですね。

協力隊と専門家との関係づけも必要

難波 協力隊員だけだと、年令が限られているから、そこへOTCAからヘッドをつけて、やって行けば面白いではないでしょうか。

中田 協力隊の経験者で、年輩の人なら、よいのではないか。農業技術者といっても、日本の試験場や普及所だけで、経験を積んだ人ではどうでしょうか。農業協力の場合、先方の技術とともに、その背景のコミュニティの理解が必要でしょう。それと言葉ですね。単純に年をとった技術者が、ついて行くというのはどうかと思っています。

難波 OTCAに、専門家のための専門家、例えば、東南アジアで農業をする人のための専門家、そういうのが必要ではないか。熱帯農業の各部門の専門家が欲しい気がする。

中田 皆さんの意見を聞いてみると、日本の海外への技術協力は、協力隊のやっている線で行くべし、という感じがしますね。

吉川 日本人が海外に出る場合、観光、留学、商業など色々あります。しかし現地の人に接する巾の広さでは、協力隊の場合はものすごく広いし、また滞在期間も長い。また何らかの仕事を仕上げねばならぬが、それには向うの歴史、慣習、方法を理解した上で、先方の力を結集させねばできません。

さきほど、お茶を教えに行つて、農薬も教え、水泳までも教えた話が出ましたが、向うへ行く人には、技術だけにとらわれないで、頭のやわらかい、創造性のある人で、知識とともに知恵のある人が

必要です。向うへ行つてから、あれがないから出来ない、これがないから出来ない、という人では困るのです。向うで感じたのですが、「企業は人なり」という言葉は、協力隊により適切にあてはまります。

また先程、難波君の触れたプロジェクト・リーダーの問題ですが、今までは技術屋がヘッドであつたけれど、技術屋ではだめなんです。技術も分り、事務もでき、性格も柔軟で包容力のある人が必要です。それは一つのマネージメントですから、企業体の社長のような働きのできる人です。こうした人を育てることも、あつてよいではないでしょうか。国際開発センターでエコノミストの養成が始つたようですが、広い意味の技術屋の養成が必要だと思います。

中田 海外に出る技術屋はそうした技術屋でなければならぬでしょう。

難波 国内で試験場のマネージメントをするのと、外国で技術協力プロジェクトを運営するのとは違うと思います。地域の人たちとぶつかりながら、その人たちの力を借り、その人たちの力を引き出すのは、技術外の才能です。そういう人の養成が、日本にとって必要ではないでしょうか。現在の日本では、そういう人が欠けている、極端に言えば、いないのではないのでしょうか。

加賀谷 私もそう思います。協力隊でなくても、海外へ派遣する人の養成は必要だと思います。また向うの要請にもとづいて、こちら側でプロジェクトを組んで、売りこみをやらなければならないと思います。先程、協力隊は何もない所へ行つて、何かを生み出すのだといわれたが、それも結構だけれど、われわれが何代もかけてこさへ上げたものをそっくり持つて行つても良いかと思っています。生活水

準を例にとつても、平等な線にまで引き上げようとすれば、文化の粹、技術の粹をそっくり持つて行つて引き上げる必要がある場合もあると思います。その場合、「ローマは一日にして成らず」と言うこともありすから、こつこつと時間をかけて、積み上げねばならぬかも知れません。

先程、難波さんから話されましたが、向うへ行っている間に、技術の低下する心配があつてはならぬと思います。われわれ自身も、テンポの速い技術の進歩に遅れたくはないのです。帰つてからもこの点を考えますね。だから向うへ行つて、末端と同じ先活をすることを、必らずしも良いとは思いません。

日本の良いもの、ある程度高いレベルのものを持つて行つて、先方がそれについてくるか、またハイレベルなものを持つて行くと、協力隊の本質がぼやけないか、技術協力を主体にすると、人間関係の面がぼやけないかと気づかわれる。ハイレベルなものは、デモンストレーションか技術者の紹介ならば、よいかも知れないが、彼らの中へ浸透させて行かねばならぬとすると、ある段階といったものを考える必要があるのではないか。

現地にあるものの改良から手をつけたら

難波 協力隊と機材の関係ですが、インドのライブールへは機械関係のものを相当に持ちこんだ。これを使ってデモンストレーションすると、大勢の農民がやつて来て、これはいくらする、性能はどうだ、最後に買えるのかと聞くのです。これを欲しいが、どうしたら手に入るかと聞かれると、インドは輸入を規制していますから、簡単には答えられません。機械を持つていくのが有益かどうか問題で

す。

つぎに話の出た、積み上げの問題と関連して、私は向うの犁の改良をやつて見たのです。インドのすきは土壤を全く反転しませんが、反転するように工夫して見たのですが、失敗しました。その代り直播条播法をあみ出しました。失敗もありましたが、この方法で稲が実るようになりました。これをインドの人たちは非常に注目して、見学にやつて来るのです。

このように現地の農法を、少しでも上げるような努力、それがボランティアの精神ではないかと思ひます。

中田 機械のデモンストレーションなどより、向うのものを使つて、向うのものを改良してやる方が：

難波 そうしたことが手始めではないかと思ひます。それによつて、こういう方法もあるのだなど、インド人に目覚めさせる。

中田 考え方として、木造の家を土台にして、近代的な鉄筋建築を乗せるという不自然さがある。土台にされた家の方もめちやめちやになる心配がある。

難波 ただし、これはあくまで分野によつて違い、高級な技術をそのまま必要とするものもある。

阿久津 一般的にいつて、自分の知っている高級な機材、例えば電子顕微鏡など、欲しいと思つたこともある。測量機械など日本で使つていて便利だったが、向うへ行つたらない、フランスのものはあつたが、日本のものの方がはるかに使い易い。こうした場合、その機械はデモンストレーションばかりでなく、実際に使えるから、どんどん持つて行つて、使わせた方がよい。

難波 私なんか、コンバインまで持つて行つたのですが。

加賀谷 レイテ島のタクロバン近くに、コロンボプランの方々がおられました。が、農薬から肥料まで、なんでも全部持つて来ておられた。しかし、私のいた二年間は、実際に活用されないで、放置されていたように思います。なにかもつたいたないような気がしました。

協力隊については、技術を主体にするか、隊の目的を主体にするかによつて、違つてくると思いますが。

難波 協力隊の目的の方が重要だと思ひますが、相手国の事情によつて、インドの場合などは、技術を持つていなければだめなんです。吉川 私の意見は難波君に近い。向うで一番よいと感じたのは、意外とかじ屋でした。かじ屋で何が出来るかといひますと、私の感じたのは鎌、それから一輪車、これだけでも今のフィリピンの農業はだいぶ改革出来るのではないか。

私の家は高知の田舎の地主で、私も農村で育つたわけ。田舎です。戦前の農具がそのまま残つていて、物が買えない時代だったから、それを使つてやつていたわけです。それを覚えていたことが、すごく役に立っているのです。今は農家へ行つても、足踏み脱穀機を見ない。千歯に至つては、私の家には残っていますが、全たなくなつてゐる。こうしたものが、現地では役に立ち、かじ屋と結びつくのです。

また近くに石灰岩が沢山ありながら、耕地の酸性は高い例もあります。簡単な石灰を焼く炉を造つて、原始的でよいから、彼らにやらせた方が、農業の進歩になると思つた。今日の消費文明から捨てられたものが、役に立つのです。

ところが、そういうものを見たこともない人、全たく農業にたずさわつていない人、農業をハダで知つていない人たちが東南アジア

へ行っている。それではおたがい困るのではないか。なにか以前の農業はこうしていた、と教えるワン・クッションが必要ではないか。耕耘機なんか持つて行つて、パァッと派手にやりますね。しかし難波君の話ではないが、すぐには求められないわけです。

フィリピンの農村地帯でも、おじいさんの代からの借金を背負つていながら、昼寝の夢は、自動車を買つて運転するといった、あきらめきつた人たちを知っています。彼らの手のとどくところまで、彼らの意欲をおこしながら、どう導いて行くかが問題でないでしょうか。

中田 手のとどくところにある技術ですね。二十年か三十年前の農業を眼で見たり、経験できる施設も必要かも知れませんか。

吉川 向うの会社なんかで肥料も、石油も、農薬も売るのがある。パンフレットを作つてどんどん売りこんでいる。肥料を使うことだけ教えて、土作りなどは問題にしていない。私の場合、堆肥でマッシュルームを作り、この堆肥を野菜畑へ入れる。両方で収入があるから、堆肥材料費も手間賃も楽に回収できる。こうした有機質農業といったものを、彼らも理解して、必要だからと試験的にやつている所は生産も増えています。

派遣期間とその間のバック・アップの問題

中田 協力隊には二年間という制約がありますが、これでよいでしょうか。また帰国されてそれぞれ職に就く人と、また海外へ出て協力プロになる人と両方あると思います。プロ化してもいいはないと思いますか、どうでしょうか。

難波 二年間は短かい、言葉を覚え、生活に慣れるのに一年はかか

る。あとの一年はすぐたつてしまふ。一年の延長は認められるが、制限のない方がよくはないか。

中田 期間は短いが、将来海外プロになる、農業技術プロになるウォーミング・アップだと考えればよいのではないか。

難波 ライプールの稲作をした場合、最初の一年は一作しか出来なかったが、二年目には二作つくつた。いま一年、最低三年は、農業の場合欲しい。

阿久津 畜産の場合、ことにブリーディングなんかになると、大変、時間のかかる仕事です。衛生関係でもそうで、したい仕事に手が着けられない。

中田 農業はほかの方面とちがつてテンポがゆるいし、サイクルの長いものもある。稲作でも一年一作の場合があり、永年作物になると、十年たたないと生産に達しないものもある。したがって、二十年、三十年サイクルになる。

加賀谷 反対に、二年間と決められた場合、この間にこれだけはやるというメドがつく。それに一生その仕事をやるわけでなく、帰ってから別の何かをやる場合、区切りがなかったら、自分の人生計画が分らなくなってしまうと思います。期間が決つておれば、一年目これをやる、二年目あれをやるという計画がたつ。ともかく、何年目か海外に出る場合、国がどうバックアップしてくれるかも問題ですね。

中田 国の体制にも非常に問題がありますね。

吉川 私なんか二年間フィリピンへ行つていて、今まで二十何年間か蓄積していたものを、全部投げ出してきた。バッテリーでいえば、全部放電して、エンブティになつて帰つて来たわけです。

ところが、大学を卒業して一年くらいして出たものですから、日

本の社会の中に根がない、十分な情報がない。この点が帰って一番心配された点でした。海外に出ていると、情報を持っていないと不安なのです。しかしそうしたアフターサービスが十分提供されているかどうかは疑問です。

ただ私の場合は、一五〇ドルのうち、三〇ドルを情報代にかけていました。友人に頼んで新聞を送ってもらい、また読みたい本を買ったりして、情報料を払っていたわけです。

日本からニュースをはじめ、協力関係の各種の情報が、大きなパイプで流れていないと、何年も海外での協力を続けるのはむづかしいですね。そうした援護射撃が必要です。

中田 色々の問題が出ましたね。私どもにとって頭の整理になったし、協力隊の本質についてもはっきり出て来た気がします。本当に有難うございました。

(以上)

熱帯農業へのイントロ―協力隊

三 苦 広 助

昭和四三年の十二月十一日という日は日本中をあっと驚かした「三億円事件」の起った日であると私ははっきり記憶しています。その翌日、私たちフィリッピン班など、四三年第三次日本青年海外協力隊員の殆んどが羽田から各々の任国へ飛び立って行きました。そして私は、四五年の大晦日の前日、夏服姿で羽田へ帰ってくるまでの二カ年をフィリッピンのミンダナオ島の山奥で、肉牛生産のため、飼料作物（牧野改良）を中心とした「協力活動」を行ってきたわけです。

私にとっては「協力活動」というよりも「熱帯畜産の実習」を行

なつたという方が適切かもしれません。すなわち、協力隊員としてフィリピンの土を踏むまでは私は熱帯のネの字も知りませんでしたし、まして熱帯農業に関しては何の知識も持ち合わせませんでした。

「協力活動」を通して私の前に未知の、また、じつに興味ある「熱帯農業」への門が大きく開かれたわけです。

帰国後、すでに一年半が経過しましたが、暗中模索しながら熱帯の畜産、とくに熱帯肉牛と牧草に関する勉強を続けています。幸いにも、海外農業開発財団からメキシコにある「国際小麦・トウモロコシ改良センター」へ十カ月間派遣され、熱帯トウモロコシについて研修を受けるチャンスが与えられ、今春帰国しました。

ときどき、協力隊の相手国産業への貢献度や、技術的人間の質に対する不満などが聞かれますが、それには多くの異った評価があるでしょう。しかし、私にとっては、協力隊員としての熱帯での二年間は、熱帯畜産へ私を誘惑してくれたかけがえのない「導入部」となりました。

たしかに戦後の熱帯農業の研究は中断されていました。しかしごくわずかですが戦前に、また戦後を通して、多くの困難の中で研究を続けられた先生方は健在です。

熱帯農業の技術は戦後、あらゆる方面でその様相を変えてしまつたでしょう。でも熱帯の気温は、湿度は、あの激しいスコールは、あの太陽の輝きは、昔のままです。

開発途上国に対する真の技術協力の重要性は毎日に高まってきましたが、残念ながらそれに応えられるに十分な農業技術者はひじょうに少ないのが現状ではないでしょうか。

私たちは健在な、経験の深い熱帯農業学者から熱帯農業に関する理論等を大いに、謙虚に学び、今後続くであろう若い熱帯農業者が育つ環境が作られなければなりません。そこから多くの研究者や技術者が養成されて始めて、開発途上国への技術援助がスムーズに運ばれるでしょう。

協力隊生活を体験した多くの青年の中のかんりの者は、熱帯農業にとりつかれてしまっています。しかし、彼等を育てる経験深い指導者は余りにも少なく、また指導教育機関もないのが現状です。

「協力隊」という種子が熱帯土壌で芽を出したあと、それを健全に育てる環境はいつ出来るのでしょうか。

協力隊は、エコミック・アニマルという悪い意味での日本の海外でのイメージを緩和するために機能している、という声も聞かれます。しかし、それは協力隊の「技術協力」が「青い」という（たしかに全般的には各人の技術水準はジュニア級といえるだろう）ことのために出てくる言葉であるとしたら、残念なことです。何れにしても、日本人の海外での活動はまさに「飢えた狼」の姿に他なりません。

協力隊とたびたび比較されるアメリカの平和部隊が、アメリカ青年に新しいタイプのフロンティア・スピリット（西部が開発途上国に置きかえられた）を発揮させる機会を与えたといわれることは、ある意味では意義深いことと思います。

日本の協力隊の姿は、公害日本を脱出するための手段として若者に使われるということではなく、人間の本来の姿をさらけ出す真の国際協調の場として考えられ、「青い技術」を通して、精いっぱい活動しながら、広い世界を体を通して知るということに計り知れない

意義があると思います。(日本青年協力隊OB)

海外協力隊事業のあらまし

(発足) 昭和四〇年四月、政府事業として発足、海外技術協力事業団がその委託をうけて実施に着手した。都内に訓練所を求めたが得られず、横浜市根岸の移住事業団訓練センターの一部によって訓練に着手された。かくて全年、一二月には第一次隊二六名が、ラオス、カンボディア、マレーシア、フィリピンへ、また翌年三月には第二次隊二二名が、ラオス、カンボディア、マレーシア、フィリピン、ケニアへ派遣された。なお初年度の予算額は七、二八七万円であった。

(経過) 隊員の海外においての努力と活躍は、相手国からけもとより、他の国々からも高く評価され、また国内においても、隊員希望者が増加したので、協力隊員としての海外派遣者数は、つぎのように年を追って増加した。

年度	派遣者数
40 年	48
41 年	103
42 年	162
43 年	178
44 年	233
45 年	217
46 年	217
合計	1,159

昭和四三年に至って、幸いにも渋谷区広尾の現在地に敷地が得られたので、訓練所はここに移された。ついで事業団の外局として、協力隊ビルが建設され、事務局と訓練所は同じ屋根の下で、業務を躍進的に充実することになった。予算も漸増し、昭和四五年度には

一億一千万円を越え、全四七年には約一億七千万円に達した。

前表に示した派遣者総数を相手国別に見ると、最も多いのはフィリピンの二二三名であり、これにつぐのはラオス、一九二名、マレーシア、一八九名、タンザニア、一六九名、インド、一一四名の順であり、その他の国を加えると一三カ国に達している。また上記主要国へは駐在員もおかれている。

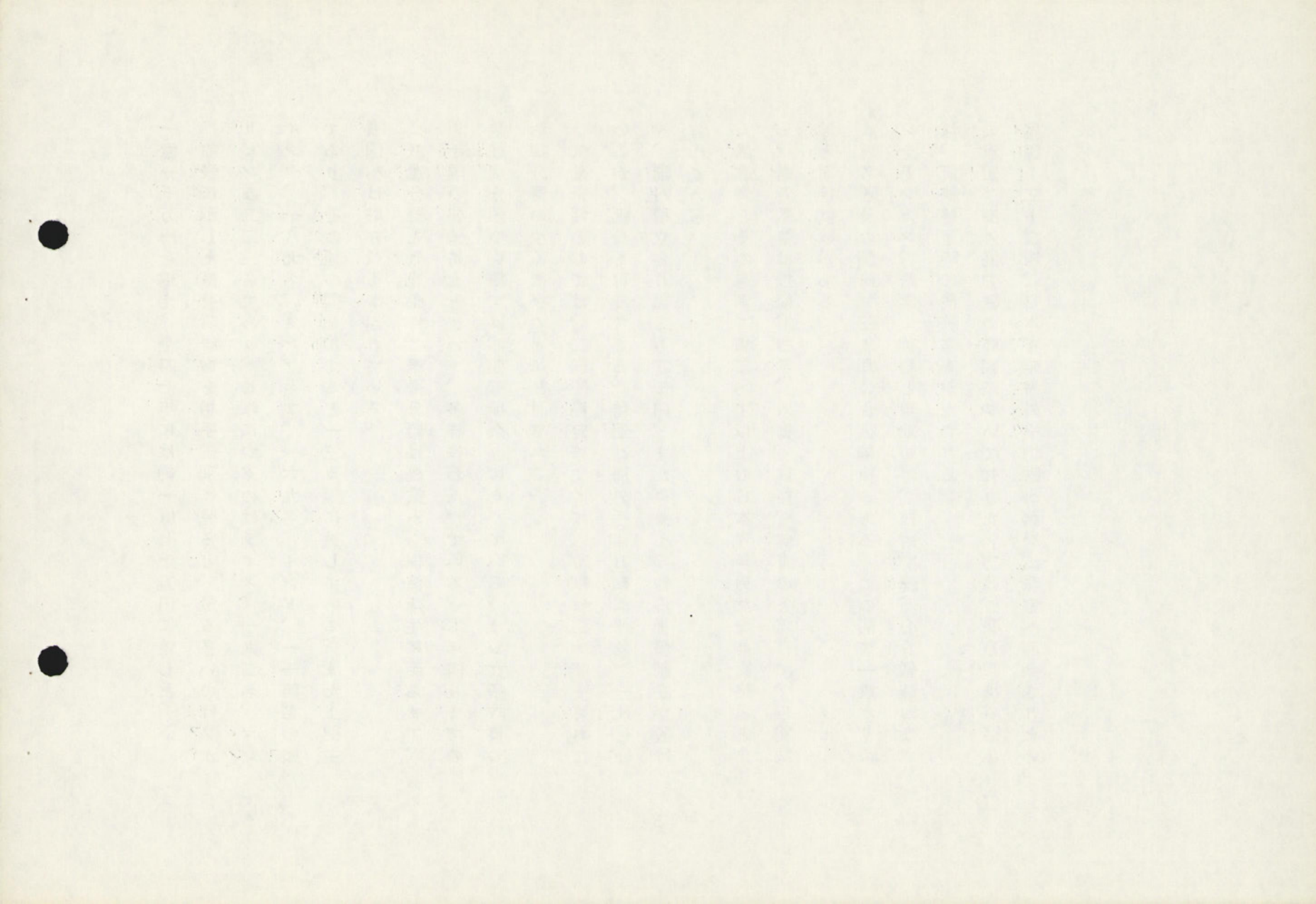
（派遣分野と派遣条件）派遣分野は農業から保健衛生に至るまで、相手国の要請にもとづいて、多岐にわたっている。本年四月までの業種別分類の実績では、四五種余りになっている。なお女子隊員の活躍分野の少くないことに注目される。

派遣条件としては、二国間協定によつて、期間は二カ年とされているが、延長も可能である。待遇は海外手当月額（平均）一七〇ドル、国内積立金月額二万五千円、また療養その他の補償制度が設けられている。

（派遣者とその選考）満二〇才以上の日本青年男女を有資格者とする。選考基準は技術、語学、人物、性格、健康の各項目で、筆記試験と面接試験がある。

（選考隊員の訓練）三カ月の合宿訓練がある。この間に一般オリエンテーション、語学（英語と現地語）、技術訓練、心身鍛練がなされ、訓練終了時に最終審査がなされる。

（附記）海外協力隊の詳細について知りたい方は、東京都渋谷区広尾四一―二―二四、日本青年海外協力隊事務局広報室へ照会されたい。



(トピックス)

米以外の穀類（パラウイジャ）

の輸出促進とビマス制度の導入

Business News 72. 9. 14

尾 村 敬 二

全インドネシアにおけるパラウイジャ耕作面積は約六五〇ヘクタールに増加している。同時にその輸出に占める役割は次第に増大してきており、その輸出額は一九六五年にわずか三六〇万ドルであったが、一九七一年には二、九五〇万ドルに達した。しかしパラウイジャ產品の役割が増大したといっても国内需要が満足されたということではない。例えば、過去5カ年間の大豆生産は毎年五〇万トン以下であるが、年間国内需要は六八万一〇〇トンである。落花生の生産は三〇万トン以下であるが、需要は四一万五千トンである。

パラウイジャ生産物の輸出が増大したことから、政府はビマス・パラウイジャの実施の必要性を感じ始めている。とくに、すでに輸出の軌道に乗ったメーズ、落花生および大豆の生産にその必要性が感じられている。実際に、国内需要を満足させようとするならば、ビマス、パラウイジャの実施は遅すぎた。しかし、政府がこれまでに最も重要な作物である米の増産を実行してきたことは当然のことである。しかし、その増産政策は生産調整を行なわなければならぬといったジレンマに陥り、さらにはビマス、パラウイジャを実施せざるを得ない。

パラウイジャ生産増大のきっかけは、日本が一九六九年に約四〇〇万トンのメーズ輸入を申し入れたことに始まる。しかし、当時その

申し入れに答えるためには、単に首を縦に振ることだけしか出来なかった。なぜならば、生産量は四〇〇万トンに達していなかったばかりでなく、輸出向けメーヅの品質に懸念があったからである。

一九七〇年の日本のメーヅ輸入は四三八万二七〇二トンであったが、そのうちインドネシアからの輸入は、わずか〇・七パーセントの三万〇八六トンであった。アメリカ合衆国からの輸入は七四・六八％である。日本の需要に答えるためにインドネシアは、資本投資および将来のビマス・メーヅを開拓するメーヅ生産の専門家を受け入れなければならぬ。おそらく、そうすることによって、パラウイジャ生産ビマス化のためのよりよい方策を得ることができよう。

もちろん、国内で生産物を販売するのに従来からの慣習によることが根強く、とくに農産物販売の分野ではその傾向が強く、客が来るのを待って売るだけの小売が多いが、輸出についても同様の傾向がある。現在、政府官吏の多くが、世界市場のことについてこのことに気がつきはじめた。しかしこうしたことから脱皮するために、世界市場の近況を早急に知ることや、どんな商品が売れるか、などの情報集収力に乏しく、またインドネシアの在外公館員の報告書作成制度が不備なことが指摘される。その結果、政府は海外からのいくつかの買付けがあつてから、生産の増大や品質の向上を図ろうとする。このようなことは、とくにメーヅ、キニーネ、茶、バティック布、手工業などのパラウイジャ生産について特徴的である。

パラウイジャ生産物が国内需要をこれまで満たしていないにもかかわらず、その生産物の輸出が期待されるので、最近になってビマス・パラウイジャ制度が実施されるようになった。それ故、政府はビマスを実施するために、プログラムを組む時にその目標が社会の

繁栄、とくに農民のそれにあることを忘れてはならない。

すでに実施されたパイロットプロジェクトをインテンシブに行なつた結果、一ヘクタールあたりの農民所得は向上した。平均して農民所得をみると、メーズ生産で一ヘクタールあたり一万八〇〇〇ルピア、落花生で一萬二〇〇〇ルピア、大豆で七〇〇〇ルピアである。一九七二／七三年度のビマス、バラウイジャ計画によると、メーズの耕作面積は三万二〇〇〇ヘクタールで、所得見込みは五億七六〇〇万ルピアである。落花生は六七〇〇ヘクタール、八〇四〇万ルピア。大豆は七八〇〇ヘクタール、五四六〇万ルピアである。将来ビマス・バラウイジャを促進するために、これまでの稲作ビマスの長短を検討し、それを参考にする。輸出増加のためにビマス政策を改善しなければならない。また、バラウイジャ生産物を原料にする諸工業が発展する時は、その原料が国内で調達できるようになる時である。

(アジア経済研究所)

熱帯農業のABC (第四回)

山口大学講師 西村 昌 造

一三、自分の生活すらも維持出来ない熱帯農業

もう十余年も前のことである。米国農業の視察の機会に、「米国農業は、第二次世界大戦の戦中と戦後に急速に発展して、遂に一九五三年に至るまでに、農業者一人が本人は勿論その外の約一七人の消費者の食糧、繊維、たばこ類を充分に供給するに至った」という説明を聞かされた。農業の生産性を表現するのに、この場合「一八名」と簡単にいわれないで、このような言葉になることが理解出来なかった。その後、度々熱帯農業を経験して見ると、熱帯では今日でも本人一人の生活を維持出来ない農業の存在することが判った。やうやく米国の歴史の中でもそんな生産性の低い開拓時代があったので、このような表現が生まれたことが了解出来た。

開発途上国の農業の実態は、少数の企業的農業の例外を除いては、一人の農業者が自らの人間らしい生活を維持出来ない低い生産性にとどまっていることが多い。そのことが、第二次的にその労働者の健康を害し、さらに生産性を低くしている。そのことは、熱帯の高湿による激しい体力の消耗と相俟って、寿命の短縮および幼児死亡率の異常に大きい数字にあらわれている。

住民農業の基礎となる要素は、土地の生産力とその気候と人間の技術、すなわち智慧である。アメリカの農業の発展を機械と化学肥料の施用に求める論もあるが、熱帯の場合はそのもう一つ前提とな

る前記の三要素について考えるべきであろう。開発途上国の農業開発は、住民農業に関する限り、単に資本と耕作技術の導入だけでは不可能なことが、最近やうやくわが国でも検討されようとしていることは当然のことである。

一四、繁茂した原始林も、開墾すると急速に瘠薄化する。

熱帯の気候の変更の激しさについては、さきに述べたので、ここでは土壤の荒廃について述べる。

熱帯、特に多雨林地帯の植物の繁茂している原始林または二次林の姿を見ると、開墾すればいかにも肥沃な農業適地になるように、われわれ温帯の農業経験者に錯覚を持たせる。

原始林あるいは二次林は、主として深根性植物、特に樹木であるために、その土壤の荒廃は鈍化したり、停滞したり、ある場合は徐々に回復する。それは雨による衝撃を防いで土壤侵蝕を防止するとともに、その深根が土壤の深層から栄養分をポンプ・アップして、葉、枝、幹を形成し、それが地表部に落ちて表土の栄養分を補うためである。

繁茂した原始林または二次林を開墾して、一年生食糧作物、特に陸稻、とうもろこし、キャッサバ等を栽培すると、年毎に急速に収穫が少なくなる。遂には、鋤一丁の労力の投入にも見合わない地力となる。多くの熱帯畑作地帯で見られるシフト・フアミング（移動耕作）はその歴史的対応策である。一度耕作した土地は、二次林として十数年放置して地力の回復を待つ。

熱帯の土壤は、特に多くの複雑な生態的要素―菌類、バクテリア、白蟻、動物―の働きによって栄養分の平衡が保たれている。栄養

分という資本の回転は急速ではあるが、資本そのものすなわち地力は比較的乏しく、これを補うのに直接的に化学肥料だけでは充分でないことは、すでに各地の実例で明らかである。

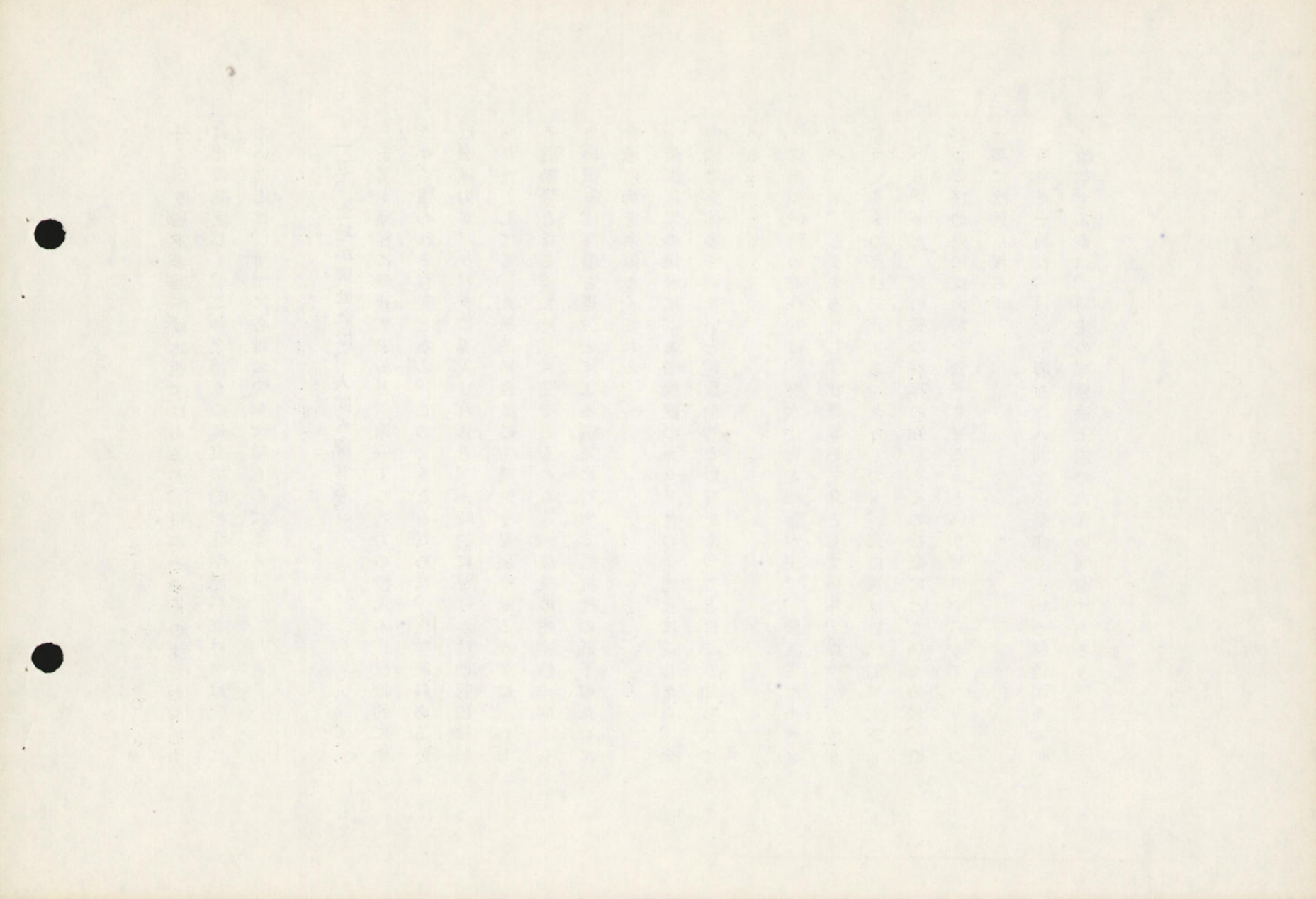
一五、土地が瘠せれば、人間も瘠せる。

土壤が極度に瘠せて来ると、鋤一丁の人力の投入が、短期的にやうやく償われる程度となる。このようなところに、化学肥料あるいは機械力がバラバラに導入されると、一時的に見せかけの収穫は得られたとしても、永続的に農業の生産性を発展させる点では、むしろ逆効果となる。また、人間そのものも真の農業の生産性が向上しない限り、高温と過労とによる病気に對する抵抗性の低下のために自己崩壊を余儀なくされる。

農園経営の場合に、ある程度のマラリヤの発病率に達したら、全労働者を休養させないと、致命的な影響をもつことはよく知られている。

従来の熱帯の農作物は、炭水化物と油脂が主で、農業者はキャッサバ、米、とうもろこし、甘藷類を主食としている。従って、仮りにカロリーの点は充分であつたとしても、蛋白質は致命的に欠乏している。また、蛋白質の保存の知恵もその社会にはないために、妊婦および幼児には肉類を食べさせないという習慣すらもアフリカの一部では見られる。

瘠せた土地は、短命の瘠せた人間を多数産むという悪循環を如何に改革するかが、将来の開発途上国の大きい問題であらう。



海外農業に対する協力事業ならびに

開発事業に従事したい方

海外農業に対する協力事業ならびに

開発事業に必要な人材を求めている方

は本財団へご連絡ください。

海外農業開発財団は左の事業を行なっています。

- 海外農業技術者となることを希望する方の登録とプール
- 新人からの海外農業技術者への養成
- 待機中における技術のブラッシュアップに必要な研修費の貸付
- 海外農業の協力および開発事業をしている団体企業等へ優秀な農業技術者のあっせん
- 海外農業調査団の編成、送出
- 海外農業情報のしゅう集、紹介

海外農業ニュース

昭和四十七年十月二十日 通巻第三十五号

編集兼発行人 石 黒 光 三

発行所 財団法人 海外農業開発財団

郵便番号 一〇七

東京都港区赤坂八一〇―三二

アジア会館内

電話 直通 (四〇二)一五八八

(四〇二)六一一

印刷所 泰 西 舎

